

本発表では、分析美学の伝統に属するマーク・デベリース (DeBellis, Mark.) の音楽知覚に関する議論を取り上げる。分析美学において現在大きな影響をもつ音楽知覚論は、大きく二種類のアプローチに分類することができる。第一に、音楽の記述に着目し、隠喩論と想像力論を手掛かりとするロジャー・スクルトンのアプローチである。第二に、認知科学や音楽理論の成果を明示的に活用したデベリースやダイアナ・ラフマンのアプローチである。近年、分析美学と認知科学の結びつきが強まっているが、視覚芸術に比べて、音楽に関するそのような学際的研究は数少ない。デベリースの理論を検討する本発表によって、音楽の学際的研究をさらに発展させることが可能となる。

本発表の構成は以下ようになる。議論の背景を簡潔に説明したのち、第1章ではデベリースの議論を概観する。デベリースに従うならば、音楽聴取 (musical hearing) とは、音楽を特定のあり方 (being a certain way) をするものとして表象する「表象内容 (representational content)」を伴う心的状態である。この見解に基づき、音楽聴取に伴う表象内容とはいかなる種類の表象内容であるのか、音楽聴取は信念や思考といった他の心的状態といかなる関係にあるのかという問いが立てられる。これらの問いに対して、デベリースは次のように答える。音楽聴取の表象内容は GTTM などの音楽理論により記述される。また、音楽聴取は概念的聴取と非概念的聴取に分類され、非概念的聴取はさらに「弱い非概念的 (weakly nonconceptual)」聴取と「強い非概念的 (strongly nonconceptual)」聴取に区別される。訓練を積んでいない聴き手は非概念的に聴取を行うため信念を含んではいないが、訓練を積んだ聴き手にとって聴取は概念的であることが示される。

第2章では、デベリースの立場が、音楽学や心の哲学などにおいていかなる位置を占めるかを見定める。デベリースの議論は、GTTM のような音楽理論が何を記述しているのかという論争や、知覚一般の概念性をめぐる論争、経験の表象的内容と現象的性格の関係にまつわる論争において意義ある立場を占めているにも関わらず、これまでそうした位置付けの作業は活発には行われてこなかった。分析系音楽知覚論を他の領域のうちに位置付けることによって、音楽知覚論を統合俯瞰的に展開する手掛かりを示唆する。

デベリースの議論を詳述し、その立場を大きな見取り図の内に描いたのちに、第3章ではデベリースの議論の妥当性を検討する。デベリースの主張を支持する議論が十分正当であるのかという観点から批判的検討を行うことで、デベリースの理論の長所と短所を明確にするとともに、維持可能な主張と修正を要する主張を峻別する。